鹿児島女子短期大学紀要
1990年版第25号79～93頁

「Hawthorne 的悪魔」の意味

—— *The Scarlet Letter* における Chillingworth ——

高　島　まり子

序

The Scarlet Letter は，姦通の事実が発覚し女が裁かれる時点から始まる。我々は罪の女 Hester，「秘密の罪」の重荷を背負う Dimmesdale，彼への復讐に生きる Chillingworth の三人を与えられる。物語の中心は，九章以降女を離れ，専ら良心の呵責に苦悩する男と復讐に生きる男との内面的闘争に置かれる。

作者は言う。Chillingworth は，「悪魔自身か悪魔の使者」[(1)]であり，「しばらくの間，この牧師との親交の中にもぐりこみ，彼の魂に対するたくらみをする神の許可をもらったのだ」（P.123）と。彼は，Chillingworth と寓話上の「悪魔」との相似点を繰返す。かたや，Chillingworth によって衰弱の度を深める Dimmesdale は，神に仕える牧師である。しかも，他の牧師達からぬきんでた名声と社会的地位を獲得している。

従って筋書きは，疑問の余地の無いものに思われるであろう。Chillingworth は寓話上の「悪魔」であり，牧師 Dimmesdale（以後「牧師」と呼ぶ）は一旦犯した罪を告白できぬ故に良心の呵責に喘ぐところの「迷える魂」である，と。物語は，まさに「悪魔」と「迷える魂」との闘争の様相を呈する。「迷える魂」が苦悩を経た後，「サタンよ，退け！」と叫ぶに至るまでの魂の軌跡の記録として読者の目に映るであろう。

しかし，Chillingworth の役割は，寓話の「悪魔」には納まりきれぬ興味ある問題を投げかける。作者の世界観においては，「悪」が一つの極を成す。彼にとって「悪」の本質とは何か，それを解明するために，「悪魔」として描かれた Chillingworth の役割を考察し，「Hawthorne 的悪魔」（以後，「H 的悪魔」と記す）とは何を意味するのか考えていきたい。

I

さて，物語全体の一貫した基調を決めるのは，明らかに「牧師」に対する Chillingworth の復讐の方法の特殊性であろう。彼は四章で，Hester に言う。"Let him live! Let him hide himself in outward honor, if he may! Not the less he shall be mine!" [(1)]（P.74）この言葉の意味は，物語の展開に従っ

て我々に明きらかにされていく。

「牧師」を復讐すべき相手と知った後，彼をいかにして自分のものにするか，それは，自分が“the one trusted friend”（p.134）となって「牧師」の「秘密の罪」の悲しみをすべて唯一の敵である自分に打ち明けさせることであった。その意図を「牧師」の敏感な自制が妨げると，復讐は“not a spectator only, but a chief actor, in the poor minister's interior world”（p.135）となるという形をとる。復讐の方法は，次のように描かれている。

> Would he arouse him with a throb of agony? The victim was for ever on the rack ; it needed only to know the spring that controlled the engine ; —— and the physician knew it well! Would he startle him with sudden fear? As at the waving of a magician's wand, uprose a grisly phantom, —— uprose a thousand phantoms, —— in many shapes, of death, or more awful shame, all flocking round about the clergyman, and pointing with their fingers at his breast! (p.135)

その「牧師」の胸には，彼の罪悪感を象徴する文字「A」が現れているのである。即ち「牧師」の良心を常にいらだたせることによって彼の「激しい苦悩に薪を加えること」(“adding fuel to those fiery tortures” p.163)，彼の魂を意のままに操ってその内面的葛藤を激化することこそ Chillingworth の復讐の方法であった。

その葛藤とは，心理学的には彼の「清教徒的良心」(フロイトの「超自我」，フロムの「権威主義的良心」と同じものであるが，彼の場合はピューリタニズムの神の教えを内面化したものと考えられるので，こう呼ぶ）の引力とそれに対抗するもう一つの引力との対立抗争に他ならない。前者は彼の過去の姦通の行為と現在の告白の拒否を叱責し，彼にピューリタン共同体の前での罪の告白を迫る引力であり，後者は告白を阻止している「臆病」と性的妄想との引力であると考えられる。この葛藤を具体的にまとめると次のようになる。まず彼の「清教徒的良心」の叱責は，彼の心に“the remorse, the agony, the ineffectual repentance”（p.134）を喚起する。彼はその罪悪感から告白の衝動にかられ，聴衆に向かって実際に自分を罵倒せずにはいられない。自分こそ“a viler companion of the vilest, the worst of sinners, an abomination, a thing of unimaginable inquity”（p.138）である，と。しかしそれは具体的な告白でないため，聴衆はますます彼を尊敬するばかりであった。このように彼の罪悪感を空転させ彼を偽善者におとしめるのは，相反する引力たる「臆病」で，十二章に描かれる如く告白の衝動を抑圧するのである。

> He had been driven hither by the impulse of that Remorse which dogged him everywhere, and whose own sister and closely linked companion was that *Cowardice* [italics not in the original] which invariably drew him back, with her tremulous gripe, just when the other impulse had hurried him to the verge of a disclosure. (p.142)

また「牧師」のリビドーは，性的妄想 "the backward rush of sinful thoughts, expelled in vain" (P.134) となって，彼を告白からますます遠ざける。この妄想は，彼の内面を「医者」として掘り返していた Chillingworth が発見した "a strong animal nature" (P.124) から生み出されるものであり，恐らくは過去の罪を契機として目覚め，彼の内面で消えることなくくすぶり続けているのであろう。

このような「牧師」の葛藤に Chillingworth がいかに働きかけたか，その復讐のメカニズムを見ていこう。Chillingworth は牧師の過去の姦通の事実と現在の告白の不実行を彼の意識面に喚起し，あるいはそれを暗黙の内に非難することによって彼の「清教徒的良心」を刺激し，その叱責を促す。秘密の罪を胸に生きている人々のことを，彼は次のように非難する。

> "These men deceive themselves," ・・・・" They fear to take up the shame that rightfully belongs to them ・・・・If they would serve their fellow–men, let them do it by making manifest the power and reality of conscience, in constraining them to penitential self–abasement! Wouldst thou have me to believe, O wise and pious friend, that a false show can be better —— can be more for God's glory, or man's welfare —— than God's own truth? (pp.127–8)

それと同時に逆方向にも働きかけて，「牧師」の告白を阻止せんとするのだ。十二章において告白の真似事をする牧師を "Come, good Sir, … I pray you, let me lead you home!" "Come with me, I beseech you, Reverend Sir ; else you will be poorly able to do Sabbath duty to–morrow." (P.151) とそそくさと家に連れ帰る場面がそれを物語る。[(2)] こうして告白は実行されず，その結果「清教徒的良心」とそれに反発する自我，エスの活動が更に激化した対立関係に入り，罪悪感はますます強まり，「牧師」の内的葛藤は一段と深刻な状態に陥るのである。このような悪循環を徒らにくり返す内に彼の罪悪感は病的に強められ，「使徒行伝」から引用された "tongues of flame" (P.136) のような雄弁を彼に獲得させる一方，彼をマゾヒスティックな苦行——鞭打ち，過度の断食，徹夜——に追いこみ，ついには十二章において彼を "mockery of penitence" (P.142) へと駆りたて，そこで出会った Hester を狂気寸前の悲惨な状態によって驚かせるに至るのである。

「牧師」は二十三章の告白の場において，自分の「清教徒的良心」の活動を "God's eye beheld it (彼の胸に現れた文字「A」)! The angels were for ever pointing at it!" (P.244) と述べ，それに対立する自我とエスの活動を "The Devil knew it well, and fretted it continually with the touch of his burning finger!" (同) と表現する。これは，彼の心理の奥底で死闘を演じた二つの引力の対立関係に宗教的表現を与えたものに他ならない。この関係を寓話的に換言すれば，彼の魂の内部の神によって支配される光明の部分と「秘密の罪」を裂け目として侵入した「悪魔」の支配圏たる暗黒部分との永遠の闘争状態なのである。

このような「H 的悪魔」Chillingworth の役割は，実際に「寓話的悪魔」のそれと一致するのであろうか。後者の役割とは，旧約聖書におけるアダムとイヴへの誘惑，新約聖書における修業中のキリストへの誘惑の試みにその起源を求めるならば，人間に快楽を約束することによってその魂を神の手の中か

ら奪い取ることと解釈し得るであろう。即ち万物の創造者であるが故に万人の魂を意のままに支配する特権を有する唯一絶対の神に対抗し，邪悪な目的のために人の魂を甘美な快楽によって誘惑し，神の支配下から奪い取り，完全に支配しようとする存在が「寓話的悪魔」である。心理学的には神の命令を内面化した「清教徒的良心」の消滅を志向すると言えよう。ここにおいて「H的悪魔」Chillingworth と「寓話的悪魔」との相異点が浮かび上がってくる。前者は，「牧師」の「清教徒的良心」とそれに相反する引力との対立抗争を志向するからには両者の共存を必要とするが，後者は彼の「清教徒的良心」の消滅を志向するのであるから。前者の意図は，「牧師」をピューリタン的善悪の葛藤という魂の「拷問」にかけることであるのに反し，後者の意図は，彼の魂をそのような葛藤とは無縁の完全なる堕落の状態におとしめることなのであるから。

このような両者の相異点は，Chillingworth を伝統的な「寓話的悪魔」として描こうとした作者の技巧と作中で実際に彼が果たす役割との間にギャップがあることを示している。即ち作者が「寓話的悪魔」の比喩を用いて表現しようとした彼の不導徳性の実体は，宗教的視点から見た伝統的な「悪」――人を誘惑し堕落させようとする「寓話的悪魔」性――ではなく，作者が創作した独自の「悪」なのである。その「H的悪魔」Chillingworth の独自の「悪魔」性を定義する前に，まず作中の「悪魔」に関する記述の中から「寓話的悪魔」のみに該当する場面を挙げてみよう。さもなければ，作者が両者とも「悪魔」と呼んでいるために少なからぬ混乱が生じる可能性があるからである。

十六章で Hester が Pearl の問いに答える "Once in my life I met the Black Man！・・・・This scarlet letter is his mark!" (p.178) の中や Hibbins 女史の言葉にしばしば出てくる "Black Man"，また八章で Pearl の役割についての記述 "Even thus early had the child saved her from Satan's snare." (p.113) の "Satan"。そして最も明白な例は十七章における Hester であろう。彼女は「牧師」にボストンを離れて共に再出発しようと誘い，彼はそれを受諾する。次章で彼は罪悪感に苦しむこともなく一挙に告白の可能性を捨て去り，神と同胞への裏切りを決定的にする逃亡を決意するのである。彼は罪悪感を抱くどころか喜びの声すらあげて，彼女を "my better angel" (p.194) と呼ぶ。この場面には明らかにアダムに対するイヴの誘惑のイメージが用いられている。しかも二十章において，Hester の誘いを受諾することによって初めて様々な悪の衝動に打負かされそうになる「牧師」の異様な体験が描かれる。それまで彼を抑えていた「清教徒的良心」はほとんど姿を消し，彼は自我によって統制し得ないほどのリビドーの奔流に飲み込まれそうになる。"・・・am I given over utterly to the fiend? Did I make a contract with him in the forest, and sign it with my blood?" (p.212) と彼は自問する。Hester の誘いは「清教徒的良心」の抹殺という「寓話的悪魔」の役割を実現したかに見える。以上の如く，「H的悪魔」Chillingworth は，牧師を誘惑して堕落させようとする「寓話的悪魔」とは一線を画する。彼独自のキャラクターを持ち，彼独自の「悪」である復讐を実行する。次に彼独自の「悪魔」性を定義するために，このような「悪」の実現を可能にした条件を列挙して考えていこう。

II

Chillingworth の復讐を可能たらしめた条件は次のようになる。

①「復讐の意図とそれを支える強烈な憎悪」
②「自分の正体の隠蔽」
③「復讐の対象の追求」
④「復讐方法——牧師の心理的操作——の考案とその実行」
⑤「牧師の生命の維持」

まず第一条件は当然ながら①の意図と憎悪であるが，作者がこれらを「悪魔」的なものとみなしていることは，Chillingworth が復讐の意図を Hester に暗示する四章において既に "Art thou like the Black Man that haunt the forest round about us?" (p.75) と彼女に言わせ，憎悪についても "the hatred that has transformed a wise and just man to a fiend" (p.167) と言わせていることからも明らかである。この憎悪は本来コキュとしてごく当然の感情であるが，問題はそれが人間として許容される限度を超えてしまい，かくも残忍な復讐の実行に至るまで強められたことである。

元来彼は「知力」の優った "a man of thought, —— the book-worm of great libraries" (p.72) であり，人間的な暖かいつながりの乏しい孤独な人であった。さすがにその淋しさに耐えられなくなると家庭的な愛の幸福を求めて Hester と結婚したが，彼女の背信行為により一層の孤独へとつき落とされた。しかし彼女の背信に対しては "I betrayed the budding youth into a false and unnatural relation with my decay" (p.73) と理性的に自分を反省し，"It was my folly" (同) と自分の責任を認め，一応の寛容を示している。そして Hester と暮らしていた頃の自分を "a man thoughtful for others, craving little for himself, — kind, just, and of constant, if not warm affections" (p.166) であったと述懐する。彼の自責の念や寛容，そして彼の言葉が示す人間像が真実ならば，彼にも復讐を思いとどまり，Hester や相手の男性を許し，「H 的悪魔」化するどころか，自分の非を償うことによってそれ以前より高次の人格を獲得する可能性すらあったであろう。ところが実際には彼は陰惨な復讐に没頭し，その外見が次第に「悪魔」的に変貌してゆくことからも明白なように内面的に堕落の一途を辿る。

それは彼の自責の念が的外れであり，彼の真の姿も自己像とはかけ離れているからである。彼は二人の結婚の失敗の原因——ひいては彼女の姦通の原因——を，彼女の若さと美貌に対して彼の老いと醜い不具という肉体的物理的不均衡に求める。しかし彼の言葉 "But all my life had bee made up of earnest, studious, thoughtful, quiet years, bestowed faithfully for the increase of mine own knowledge, and faithfully, too, though this latter object was but casual to the other, —— faithfully for the advancement of human welfare." (p.166) が示すように，彼らの結婚の失敗の原因は，何よりも自分の知的活動を第一とする自己中心的冷たさ，情より知に傾いた学者にありがちな暖かい愛の欠如だったのである。頼る人もない新大陸へ若妻一人を先に旅立たせ，約二年間も音信無し

で放っておくという彼の仕打ちからもそれが解る。彼自身それをかすかに自覚してか，“Was I not, though you might deem me cold, nevertheless a man・・・of constant, if not warm affection？”（p.166）と彼女に問う。しかし結局は認識不足で，彼の自責の念は，二人の肉体的不均衡を「知力」によって解消しようとした自分の学者としての愚かさに向けられている。彼の自責の念をかくも的外れにしたものは何か。それは，彼の描いてみせる自己像が自ずと語っている。自己中心的な冷たい性格にも拘らず，彼は自分を“a man thoughtful for others, craving little for himself,——kind, just, and of constant, if not warm affections”（p.166）と正当化し，結婚の失敗の原因を自分の内部にではなく外的な事実——二人の肉体的物理的不均衡——に求め，しかもそれを Hester への無私の愛という自己犠牲によってではなく，「知力」によって彼女を魅了し，いわば従属させることによって解決しようとしたこと等から彼の真の姿が浮かび上がってくる。それは，決して自分の非を認めず，どこまでも自己を正当化する「自尊心」の権化のような人間の姿である。彼はこの「自尊心」の故に，自己像を歪曲し，悲劇の真の原因を認識し得ず，的外れな自責の念しか持てず，その結果牧師への憎悪は際限なく増幅され，コキュとして許容される限度を超えることになったと言えよう。

しかしながら，もし真正なるピューリタンであったなら，たとえ果てしなく肥大した憎悪を抱いたとしても，それを唯一絶対の存在たる神に向かってすべて吐き出し，自分の手で敵を捜し求めることもなく傷ついた自分の心の救済も復讐も含めた事態の解決を神に委ねきれたはずであろう。たとえ憎悪に駆られて敵を探索発見したとしても，共同体に訴え出てその裁きに任せる等の別の方法でその憎悪を発散することもできたであろう。それは，当時のピューリタン社会では当然許される行為であった。即ち，いかに強烈な憎悪があっても，ピューリタンとしての枠内ではこのような個人的復讐の意図は持ち得ないのである。ところが，彼にはピューリタンとしての信仰心が欠けていた。彼は神や共同体の裁きを待つのでなく，彼自身の手で独自の復讐をする決意をした。人知では測り難い神の意志を拒否し，「憎悪」という薪に「自由意志」というマッチで火をつけ，「個人的復讐」の炎を燃え上がらせたのである。

さて，この神をも恐れぬ「自由意志」が，既に述べた彼の「自尊心」と無縁であるはずはない。自分を良しと認め，どこまでも正当化しようとする「自尊心」は，神の意志による支配よりも自分自身の意志による自由な判断の方を優位に置く。即ち，「自尊心」こそが「自由意志」の母なのである。このように彼の「自尊心」は，ごく人間的な憎悪を「悪魔」的なレベルにまで激化させたばかりでなく，彼の「自由意志」を鼓舞して彼をピューリタニズムの世界における異端者に変え，独自の陰惨な復讐へと駆りたてたのである。結局条件①は，表面的にはコキュの憎悪とそれに支えられた復讐の意図のように見えるが，実は「自尊心」によって強められた「憎悪」と同じく「自尊心」によって生み出された「自由意志」とが結びついて成立した復讐の意図なのである。従って Chillingworth の「H的悪魔」性の一要素は，彼の「自尊心」であると言えよう。次にこの「自尊心」とピューリタニズムとの関係を，もう少し掘り下げてみたい。

この「自尊心」という特性は，ピューリタニズムの源流であるプロテスタンティズムの祖ルターの教義においては特に非難の対象となる。というのもフロムによれば，ルターが人間の本質的な「悪」——「人間性が堕落していること」[3]——と「無力」——「善を選ぶ自由が全く欠けていること」——を根本概念の一つとして強調し，その確信に基づいて「神の意志に身を任せること」[4]即ち神への「絶対服従」

と「自己放棄」によってのみ救われ得る，と説いたからである。自己を卑しいものと認め完全に否定して初めて，人間は信仰を神によって与えられ，神の愛と救済を確信することができるというのである。このような視点に立てば，自己を正当化し良しと認める「自尊心」は，神への「絶対服従」と「自己放棄」と真っこうから対立する特性であり，それ故に人間を神の恩窮と救済から最も遠ざけるものであろう。

この概念を Chillingworth の場合にあてはめて考えてみよう。既に考察した如く，彼は「自尊心」の故に自己を正当化し，自分の非—— Hester に対する暖かい愛の欠如——に気付かない。即ち，ルターの強調する自己の内なる「悪」を認めない。従って真の罪悪感が生まれるはずもなく，その代わりに憎悪が無限に肥大していった。また Chillingworth は，その憎悪を神を介してではなく，自分の手で復讐することによって発散させようとした。即ち，彼はルターの強調する人間の「無力」を認めない。彼は「自尊心」の故に，彼自身に問題を解決する能力があるという前提に立ち，神の意志にすべてを委ねる代わりに「自由意志」に従って個人的復讐の道を選んだのであるから。こうして Chillingworth は確かにルターの説く通り，「自尊心」の故に自分の「悪」と「無力」を認めず，ピューリタンに求められる神への「絶対服従」と「自己放棄」とは正反対の態度をとり，神の恩寵と救済からほど遠い地点に立つこととなったのである。

では彼の対極に立つ人物，彼の犠牲者であると同時に最終的には内面的葛藤を克服してピューリタン共同体への告白を達成し，神を讃えつつ死んでゆく——神の救済を獲得した如く描かれる——「牧師」はどうであろうか。彼のパーソナリティーの特徴は，その顕著な受動性である。この点について藤川玄人氏は，「ディムズデールがたとえ束の間とはいえエネルギーを奪い起こしてヘスターを愛したことがあった，などというのは信じ難いことである」というＥ・Ｔ・ボーデンの言葉を引用しつつ次のように述べる。

> ……この聖者（ディムズデール）には能動性が本質的に欠けているのではないかという印象を読者は持ち続けるであろう。……彼は始終自分の意志で何ひとつ事を決定することも行動に移すこともできない。……もし彼が救われることがあるとするなら，それは彼自身の努力によるのでなく，外部からの強大な力——例えば……神の恩窮という奇蹟——を待つ以外にはないと思われるほど彼は自失していた。(5)
>
> ……
>
> （彼には）内発的な意志決定の能力は全く消失していた。……善を選ぼうとする意志は働かなくなっている。それどころか悪を選ぶ意志決定の能力さえ消失し，無明の闇の中を徒らにさまよう如くである。(6)（傍点筆者）

このような「牧師」の受動性は，ルターの説いた人間の本性を特徴づける「無力」とぴたりと符合する。これはむろん彼の内面的葛藤と Chillingworth の復讐の影響にもよるが，元来何よりも信仰によっ

て支えられている彼の本性ではなかったろうか。

> In no state of society would he have been what is called man of liberal views ; it would always be essential to his peace to feel the pressure of a faith about him, supporting, while it confined him within its iron framework. (P.118)

そしてこのような受動性——善を選ぶ自由の欠如としての「無力」——は，ルターにとっては人間が確信せねばならぬ人間の実体であった。『奴隷意志論』の中で，彼は人間の「無力」についてこう述べる。

> このようにして人間の意志は，いわば神と悪魔との中間にいる獣のようなものである。もし神がその上に宿れば，神の意志のままに意志し，動くであろう。……もし悪魔がのり移れば，悪魔の意志のままになる。どちらの乗り手の方へ走るか，またどちらを求めるかは彼自身の意志の力にはなく，乗り手がそれをとらえようと争うのである。
>
> ……
>
> 人間は神に向かっては「自由意志」を持たない。彼は，神の意志に対しても悪魔の意志に対しても，捕われの身，奴隷，奉仕する召使いである。(7)（傍点筆者）

これらの言葉は「牧師」の状態に完全に一致しており，ルターの表現を借りれば，彼は内面化された神——彼の「清教徒的良心」——と悪魔——性的妄想と「臆病」——という対立する引力にはさまれて「自由意志」を持たない奴隷の如くである。彼はルターの人間観である完全に「無力」な状態を体現し，むろんそれを自覚もしていればこそ「神」の意のままになれない自分を，即ち性的妄想を抹殺し「清教徒的良心」の叱責に従って公衆の面前で罪の告白を実行できない自分を責め，罪悪感に苦しむのである。しかしこのような受動性，「自由意志」の欠如，「無力」感は一見救済からほど遠い状態であるように見えるにも拘らず，ルター的視点から言えば神の恩寵による救済を受け入れるのに必要不可欠な状態であるということになるのである。

ではルターの言う人間の根本的な「悪」については，彼は同様に自覚しているであろうか。彼は確かに姦通の罪を後悔し，性的妄想と闘い，罪を告白できぬ故に罪悪感に悩み，聴衆に向かって自分は恥ずべき堕落した人間であると語る。しかしながら一方では，彼は自分が "an atheist, — a man devoid of conscience, — a wretch with coarse and brutal instincts" (P.183) であれば心の平和を失わずにすんだはずで，"whatever of good capacity there originally was in me, all of God's gifts that were the choicest" (同) も自分を苦しめるだけだと Hester に訴える。即ち彼は激しい罪悪感や前述の「無力」な精神状態にも拘らず，心のどこかで自分の良心の気高さなり精神的優秀さなりに誇りを，換言すれば「自尊心」を持っているのである。そのような「自尊心」は，彼が Hester の誘いをいったん受け入れたために「清教徒的良心」がほぼ消滅に近い状態になった場面で，より露骨に現れる。

共同体からの逃亡の予定日が総督就任祝賀の説教の翌日であることを知ると，彼は内心 “ That is most fortunate！” （P.206）と喜ぶ。彼は名誉ある説教者の役目をりっぱに果たしてこの地に有終の美を飾り，共同体における自分の評判を傷つけたくないと思ったのである。そんな彼には自分の根本的な「悪」の自覚など望むべくもなく，神による救済を獲得するための絶対条件であるとルターが言うところの神への完全な「自己放棄」や「絶対服従」は生まれようはずはない。彼がそれらを達成し告白に至るためには一切の「自尊心」を捨て去らねばならず，そのためには自分が根本的に「悪」に満ちた存在であるという自覚がなければならない。従って，そのような自覚を促すに足る「悪」——彼の「清教徒的良心」がほぼ消滅に近い状態にまで衰弱し，代わりにリビドーの奔流が彼を飲み込むほどの「悪」——の経験が必要不可欠となる。作者は，そのような経験に「牧師」をいったん突き落とさねばならない。それが二十三章の彼の告白の前提として十七章，十八章，二十章において彼がHester の誘いに応じて逃亡を決意する場面なのである。

森から帰宅した彼は，以前の自分を思い浮かべて考える。

> That self was gone! Another man had returned out of the forest ; a wiser one ; with a knowledge of hidden mysteries which the simplicity of the former never could have reached. A bitter kind of knowledge that！ （P.214）

今や彼は以前とは全く別の人格に生まれ変わっているのである。しかしこのままでは彼は本当に堕落への道を転落するしかないわけで，その一歩手前で彼にこの完全なる「悪」に近い状態を自覚させ神への「自己放棄」と「絶対服従」を達成させるためには，彼の「清教徒的良心」が再び蘇ることが必要不可欠である。それを可能たらしめたのが，彼と Chillingworth との出会いである。

「牧師」は彼を見るなり「片手をヘブライ語の聖書にのせ，もう一方の手は胸の上に置いたまま，蒼白になって言葉もなく立ち尽くして」[8]しまう。既に考察した如く，「寓話的悪魔」の役割とは異なって Chillingworth は，「牧師」の魂の暗黒部分と同様に「清教徒的良心」をも必要とする。彼の秘密をつかんで以来 Chillingworth の目的はこの両者の葛藤を激化させることにあり，彼の「清教徒的良心」を刺激して彼が「秘密の罪」を意識するように働きかけ，それに成功してきた。彼に長期にわたって魂を操られていた「牧師」は，容易に彼の専制支配から脱出し得ない。しかも，今やHester から彼が彼女の夫であり卑劣な手段で自分を苦しめてきた敵であることを知らされているのである。彼の顔を一瞥しただけで「牧師」は「秘密の罪」を意識し，その意識が心の闇を稲妻のように切り裂いてそれまで秘かに彼に嘲笑され愚弄されてきた罪深いみじめな自分の姿を，そしてまた森で生まれ変わったはずの現在の自分の姿の実体を照らし出すのを見たことであろう。それは，「情熱の罪」[9]に過ぎなかった過去の罪——それですら「牧師」をあれほど苦悶させてきたのだが——に比べて格段に恐ろしい大罪を犯して堕落した自分の姿であった。現在の罪は，“Tempted by a dream of happiness, he had yielded himself *with deliberate choice*, 〔italics not in the original〕 as he had never done before, to what he knew was *deadly sin*.” （P.213）と作者が述べるように，過去の「情熱の罪」とは違って慎重に選択して意図的に犯されたものであるが故により大きい罪なのである。即ちこ

の罪の深さは，神とピューリタン共同体への告白の拒否と Hester との再度の姦通につながる逃亡の決意という内容ばかりでなく，「自由意志」による選択という罪に至るプロセスにも帰因するのである。これはルターの主張する「無力」の自覚と相反するが故に神による救済を妨げる罪であり，実際「自由意志」を働かせた結果は，七年前の罪より更にひどい堕落となった。「自由意志」がいかに罪深いものか，自分の「無力」の自覚を失うことがいかに恐ろしい堕落を招くかを痛感した「牧師」は，二度と「自由意志」を行使しようとはしないであろう。彼は再びより徹底的にそれを抑圧し，「無力」の度を深めるであろう。「牧師」の内部にかすかに残存していた「清教徒的良心」は，森から帰宅するまでの一時的なリビドーの高まりの後ゆえに一段と強化されて蘇り，この過去と現在の罪深い自分に対して一段と激しい叱責を浴びせ，罪悪感を目覚めさせる。胸にのせた片手は，文字「A」の現れた胸を思わず押えたのであり，彼の罪悪感が再燃したことを意味することには疑惑の余地が無い。この罪悪感は，以前のそれとは比較にならないほど強烈なものであったに違いない。なぜならば，既に述べた通り，新しい罪は過去の罪とは比較にならぬ全く弁解の余地の無いものであり，罪の深さに応じて罪悪感も強まるはずだからである。その罪悪感は，それ以前の彼に欠けていた根本的「悪」の自覚と同義である。その自覚が彼の「自尊心」を一挙に吹きとばし，いったん失った「無力」への復帰とあいまってルターの説く神への「自己放棄」と「絶対服従」を可能たらしめ，彼を告白の決意に到達させるに十分だったのではなかろうか。その決意を暗示するのが，「ヘブライ語の聖書」に置かれたもう一方の手ではなかろうか。以後の物語の展開が，この一瞬の内に起こった彼の変貌を証明するであろう。彼は一転して猛烈な食欲で食事をし，選挙祝賀の説教の新しい原稿を恍惚境の内に書きあげる。そして演説の後の激しい肉体的衰弱に耐え，罪の告白を果たし，ピューリタニズムの神を讃えつつ死んでゆくのである。

以上見てきた如く，「H的悪魔」性の一要素である Chillingworth の「自尊心」がピューリタニズムにおいて人間を神による救済から遠ざける元凶であることは，作者 Hawthorne にとっての「悪」がピューリタンとして非難され，排斥されるべき心理と一致していることを示している。彼の対極に立ち神による救済を獲得し得た「牧師」の告白に至るプロセスからも，それは逆説的に証明されたと言えよう。「自尊心」の消滅，即ち自己の「悪」と「無力」の確信が，神への「自己放棄」と「絶対服従」を可能たらしめ魂の救済に導くからには，逆に「自尊心」がある限り救済は望めないのであるから。注目すべきは，以上の考察が，Hawthorne の心理におけるピューリタン的要素への共鳴を証明しているということである。

Ⅲ

さて復讐の条件②「自分の正体の隠蔽」は，「牧師」に対して特殊な復讐を行うために不可欠の条件であるが，それ自体は特に「H的悪魔」の独自性を示す要素にはなり得ないのではなかろうか。ただミルトンの『失楽園』のサタンを連想させ，この作品が Hawthorne に与えた影響を示すと同時に Chillingworth に悪魔性を付与する効果をもつのは確かである。またこの点に関する藤川氏の指摘は興味深い。この隠蔽は「真の自己を世間との交わりから遮断した証拠」であり，それまでの「微弱ながら人間性を保持していた自己から脱皮して，悪魔に弟子入りする」という「変身の決意」つまりは「人

間性放棄を象徴する行為」であるという。[10] 確かにその通りであり，同胞への正体の隠蔽は結局は神への隠蔽につながり，神の支配の拒否をもたらすとも言えよう。「牧師」でさえ，告白を果たすまでは罪深い真の自己を同胞に隠すことによって神から完全に支配されることを拒む結果になったことからも，「自分の正体の隠蔽」は罪への入口の一つと考えられる。「H 的悪魔」とまではいかずとも，この隠蔽が Hawthorne らしい悲劇の発端となる例は他にも見出される。*Twice-Told Tales* 中の *Wakefield* はその顕著な例であろうし，*The Minister's Black Veil* もある意味ではそうだと言えよう。自分の正体を偽っていては人間らしい真の連帯は生まれるはずはないのであるから，人間どうしの暖かい連帯に高い価値を置く Hawthorne としてはこの隠蔽は人間の絆を断切る許せない行為であったに違いない。*The Scarlet Letter* もまずは「牧師」と Chillingworth の「正体の隠蔽」にその悲劇の発端があったことからも，この罪は Hawthorne に強く意識されていたと思われる。「H 的悪魔」Chillingworth ではなく「牧師」の体験から学ぶべき教訓として，作者が次のように書いているのは意味深い。"Be true! Be true! Be true! show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!" (p.248) しかし，本論ではこの点についてはこれ以上触れない。

さて次に，復讐の条件③「復讐の対象の追求」と④「復讐方法——牧師の心理的操作——の考案とその実行」について考えてみたい。このように特殊な心理操作による復讐は，「知力」の人にして初めて可能となる。「牧師」はこの「知力」による心理操作を "He has violated, in cold blood, the sanctity of a human heart." (p.187) と表現したが，これは作者の他の主人公 Ethan Brand によって犯された "Unpardonable Sin" と共通点を持つ。これは Hawthorne の *The American Notebooks* には "a want of love and reverence for the Human Soul"[11] と定義されている。Ethan Brand の犯した罪は，具体的には時間の進行に従って次の三部分に分けられる。

ⓐ：他者の心の侵略——人間の心を，悪を求めて覗き見し，分析する。
ⓑ：自分の心の圧殺——知性の発展に伴って，彼の心はひからび，人類同胞に対する共鳴や愛を失う。
ⓒ：他者の心の支配——人間を自分の被験者とみなし，魂の支配によって，彼らを操り人形の如く支配する。

③「復讐の対象の追求」は，Chillingworth が「牧師」を復讐の対象と確信するまで，即ち彼との交際の開始から彼の胸の文字「A」の発見までであり，上記のⓐ段階に該当する。Chillingworth は彼の病気に興味をひかれ，"Wherever there is a heart and an intellect, the diseases of the physical frame are tinged with the peculiarities of these." (p.119) と知っている「医者」として治療を開始する。そして重大な秘密があるに違いないと信じて「牧師」の内面世界を探索するのである。彼は "I shall seek this man, as I have sought truth in books; as I have sought gold in alchemy." (p.73) と宣言する。これらの言葉が示す如く，彼の対象追求における自信は，書物や錬金術に象徴される人間の「知力」——超自然的な神の力に相反する「知力」——への信頼に基づいている。彼は患者の心の秘密を最後まで追求する "skill" (p.119) を持ち，それを生かす "opportunity" (同) と "license" (同) を与えられている「医者」なのであるから。そのような「医者」としての

自信ゆえに，彼は「秘密の罪」を明らかにする神の啓示に真っこうから人間の「知力」による探索を対抗させる。

このような探索が「悪魔」性を帯びていることは，十章に暗示される。「医者」は，「牧師」に治療のためにまず心の悩みを打ち明けるようにと迫るが，この申し出は，次のように激しく拒否される。

> "No ! — not to thee ! — not to an earthly physician ! ・・・・ But if it be the soul's disease, then do I commit myself to *the one Physician of the soul* ! 〔italics not in the original〕 ・・・・ But who are thou, that meddlest in this matter ? — that dares thrust himself between the sufferer and his God? "(pp. 131 — 2)

「医者」は「患者」に，清教徒的見地からは唯一の「魂の医者」たる神にのみ打ち明けるべき秘密を明かすよう迫る。彼にとっては「患者」の魂の苦悩は，神の治療に任すべき神聖な意味を失い，単に肉体の病気の原因であり，肉体を補強するために処置を加えねばならぬ唯物的な現象に過ぎない。従って彼は，「患者」の魂に敬愛の気持ちを持つことなくそれを探索するのである。そして「患者」の魂の秘密が明らかになった時，彼が仮に復讐の意図の無い単なる「医者」であれば，その秘密を神の手から奪い取り，自らの「知力」で処置することによって肉体の病気を治療することになるであろう。このような「知力」への信頼が何を意味するかは復讐の条件⑤とも関連するので，後に再度検討したい。

さて④「復讐方法の考案とその実行」は，時期的には「牧師」の胸に文字「A」を発見してから後であり，"Unpardonable Sin" のⓒ段階に該当するが，この復讐のメカニズムについてはⅠ章で既に考察した通りである。ここでは，彼の復讐が感情的なものでなく，冷静な「知力」による心理操作であることと，彼の復讐が人間精神を神に代わって支配せんとする企てであるが故に神の権限への侵略であるが，その支配の内容が「寓話的悪魔」性とは明確に異なっていることを指摘するにとどめよう。条件④から，Chillingworth の「H的悪魔」性の第二の要素は,「知力」による人間精神の支配であると言えよう。

さて復讐の条件⑤「牧師の生命の維持」はどうであろうか。③の所で見た如く Chillingworth は，単なる肉体の疾病のみならず魂の疾病によって生じた肉体の病気までも，神の治療を排し人間の「知力」によって治療しようとする「医者」である。この「知力」は，我々に他の科学者——人間の限界を打破せんとして傲慢の罪を犯す完全主義者として作者が批判した科学者——の系譜を思い起こさせる。それは科学の知識と技術によって神の定めた自然の節理を変革し，永遠不滅の肉体を持つ人工のアダムとイヴ，そして彼等を取り巻く人工のエデンの創造者たらんと神に反逆したところの *Rappaccini's Daughter* の Rappaccini の系譜である。

ここで Rappaccini の「悪魔」性に，寓話的視点から少々言及したい。アダムとイヴが原罪を犯してエデンから追放されて以来，人間は「知力」のみによって神から不完全な自立をしたために精神と肉体，生と死，自然と人工という二重性を不完全限界として持つよう運命づけられた。即ち病気，老い，死，醜さといった肉体の不完全性は原罪の結果でもあり罰でもあると考えられる。Rappaccini はこの肉体の不完全性を改革することによって原罪の結果を消し去り，ひいては原罪そのものを自らの手で抹殺せ

んとする。即ち完全な肉体を有する人間——原罪を持たぬ人間——を創造し，自らは神の特権たる創造という行為のゆえに神に似た者となるのである。そうなれば彼は，自分の創った人間の肉体はもちろん，永遠の生命の授与という甘美な誘惑によって精神をも支配し得るであろう。もはや人間は，神による魂の救済と死後の永遠の生命の獲得を願って神に服従する必要を認めないであろうから。これは，人間の魂を神の手から奪い取る「寓話的悪魔」性に発展し得る行為であり，Rappaccini は一種の「寓話的悪魔」として描かれている。

しかし心理的に見れば，完全な肉体の創造が意味している原罪の抹殺とは，ルターの主張する人間の「悪」の完全な否定である。また彼は完全な肉体を創造するため，神に祈るのでなく，ルターの唱える人間の「無力」を否定し，「知力」を駆使して自ら解決に乗り出す。即ち彼は，人間の魂の横奪（神への反逆）という「寓話的悪魔」性の表面の下に，人間の「悪」と「無力」の徹底的な否定——「自尊心」の極致——という反ピューリタン的心理を備えているのである。同時にその心理の実現が「知力」によって初めて可能となる点は，条件④とも共通している。*The Birthmark* の Aylmer, *Dr. Heidegger's Experiment* の Dr. Heidegger,「医者」Chillingworth もまた彼の系譜に連なっている。復讐の条件③，⑤からまとめられる「H 的悪魔」性の第三の要素は，人間の肉体と精神の支配という「寓話的悪魔」性と，その内に潜む反ピューリタン的「自尊心」とそれを可能にする「知力」と言えよう。

結　び

以上の考察から，元来「寓話的悪魔」でないはずの「H 的悪魔」Chillingworth の中に，復讐とは無関係な「医者」(「寓話的悪魔」) が「復讐者」と同居していることが解った。「復讐者」は「自尊心」の故に「知力」による「牧師」への復讐（精神の支配）を行ない，「医者」は，やはり「自尊心」の故に「知力」による神への反逆（「牧師」の肉体の支配）を企てる。両者に共通の鍵は「自尊心」というピューリタンとして非難，排斥されるべき心理と，その「自尊心」を満足させるための武器としての「知力」である。この二つが Chillingworth における「H 的悪魔」性の最大の特徴であると結論することができよう。人間が「自尊心」によって神という絶対的権威から独立し，「知力」を武器に自由に思考し行為し，創造にまで手を伸ばすことができたのは確かに事実であろう。しかしルターの概念を柱とするピューリタニズムにおいては，それらは許されぬ罪であり，それを作者が「H 的悪魔」性として Chillingworth の中に醜く具象化したということは，作者の内なるピューリタン的要素と共に権威からの独立や自由に対する彼の反発，いや恐怖感すら暗示しているのではないだろうか。

注

(1) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* 小山敏三郎・編注 （南雲堂，1967） P.74
（以下，文中のカッコ内の頁数は全てこの版のものを示している。）

(2) 二十三章の「牧師」の告白の場面では， Chillingworth はより露骨に次のように叫ぶが，既に「牧師」の決意は固く，告白を阻止する力になり得なかった。

"Wave back that woman! Cast off this child! All shall be well! Do not blacken your fame, and perish in dishonor ! I can yet save you ! Would you bring infamy on your sacred profession?" (p.242)

(3) エーリッヒ・フロム，日高六郎訳，『自由からの逃走』(東京創元社，1974)，p.83

(4) 同，p.84

(5) 藤川玄人，『共同体とホーソーン』，(弓書房，1982) pp.181－2

(6) 同，pp.201－2

(7) Martin Luther, "The Bondage of the Will", translated by Henry Cole, M. A., (Grand Rapids, Michigan : B. Erdmands Publishing Co., 1931), p.74.
からエーリッヒ・フロム，『自由からの逃走』p. 84への引用

(8) Hawthorne, *op. cit.*, p.214
The minister stood, white and speechless, with one hand on the Hebrew Scriptures, and the other spread upon his breast.

(9) *Ibid.*, p.192.
But this had been a sin of passion, not of principal, nor even purpose.

(10) 藤川玄人，*op. cit.*, p.143.

(11) Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks*, quoted in Twentieth Century Interpretation of "*The Scarlet Letters*" (Yale University, 1968) p.17.

参考文献

Crews, Frederick C. *The Sins of the Fathers* : Hawthorne's Psychological Themes. New York : Oxford U.P. ,1966.

Kaul, A.N. "The Blithedale Romance," in Hawthorne :
A Collection of Critical Essays edited by A. N. Kaul. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice－Hall, Inc.,1966.

Hawthorne, Nathaniel, The Complete Novels and Selected
Tales, edit. Norman Holmes Pearson. New York, The Modern Library, 1937,

Martine, Terence. *Nathaniel Hawthorne.* New Haven,
Conn. : College & University Press, 1965.

Mcpherson, Hugo. *Hawthorne as Myth－Maker* :
A Study in Imagination. Canada : University of Toronto Press, 1971.

Waggoner, Hyatt H. *Hawthorne : A Critical Study.*
Canbridge. Massachusetts : The Belknap Press of Harvard U.P., 1955.

エーリッヒ・フロム．『自由からの逃走』日高六郎訳．東京創元社，1974.

エーリッヒ・フロム．『人間における自由』谷口隆之助・早坂泰次郎訳．東京創元社，昭和30年.

ヘンリー・ジェイムズ.『ホーソーン研究』小山敏三郎訳. 南雲堂, 1972
大井浩二.『ナサニエル・ホーソン論』南雲堂, 1982
太田三郎.『英米文学』清水弘文堂, 1975
R・W・Bルーイス.『アメリカのアダム』斎藤　光訳, 研究社, 1973
濱田政二郎.『ユートピアとアメリカ文学』研究社, 1973
柳生　望.『アメリカ文学とその風土』朝日出版社, 1970
藤川玄人.『共同体とホーソーン』弓書房, 1982